

# 外国にルーツを持つ子どもたちの今

— 子どもくらぶ「たんぽぽ」の取り組みから —

リリアン・テルミ・ハタノ 近畿大学総合社会学部 准教授

〔第 28 回文明研究所講演会〕  
2013 年 1 月 15 日

**司会** それでは東海文明研究所の講演会を開催させていただきたいと思います。まずはじめに文明研究所所長の川野辺裕幸先生からご挨拶をお願いしたいと思います。それでは先生、お願いいたします。

**川野辺裕幸** 文明研究所の講演会は年に 2 回ぐらいやっております。今日は近畿大学のリリアン・テルミ・ハタノ先生に来ていただきました。今日のテーマは「外国にルーツを持つ子どもたちの今」ということで、日本にいらっしゃる外国人の子どもさんに、NGO の団体を主宰されて教育をされている、そういうお話を含めて、ご講演を伺おうと思っています。外国人の子どもたちと日本との関係、日本の教育の在り方というのはとても大事なことで、これからますます日本もそういう人たちと一緒に日本をつくっていく、あるいは日本が外国に開いていくということにとっても関係することだと思っています。文明研究所もこの点についてはいろいろ努力をしまし、東海大学もいろいろなかたちで関わってきました。2009 年から、ブラジルの政府と一緒に、ブラジル学校の先生を通信教育で育成するというプロジェクトに丸となって取り組んでおりますし、今日、あとでご紹介をされる小貫先生はもう何年もかけて、日本にいらっしゃる外国人の子どもたちと一緒にいろいろなかたちで、教育も含めて交流していくというプログラムをやってきています。

今日は、そのような関連のなかで、リリアン先生にお話を伺おうと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

**司会** どうもありがとうございました。それでは、ご紹介はわたくしよりも長年のご友人でいらっしゃる、教養学部の小貫先生からリリアン先生をご紹介いただきたいと思います。それでは小貫先生、お願いいたします。

**小貫大輔** リリアン先生をご紹介したいと思います。リリアン先生は、日本に来られてもう 20 年になります。彼女のご両親は、戦後日本からブラジルに移住された日系移民で、お母

様は、先にブラジルに移住していたお父様と写真で知り合っていて、それでブラジルに呼び寄せられたそうです。まだ会ったこともない人のお嫁さんになるため、船に乗ってはるばる 40 日かけてブラジルまで行って、初めて向こうでお父様と出会い、結婚されたということだそうです。

リオデジャネイロという当時ほとんど日系人の住んでいない街で、ご両親はブラジル人の間で子どもたちを育て、でも家庭では徹底して日本語を使いつづけていたということです。リリアン先生は、ごく普通のブラジル人としてブラジルの大学へ行って、ブラジル人として生きてきたのですが、家庭の中では日本語を喋っていた。それが日本に留学するきっかけでもあり、結局日本に留学してから 20 年、ずっとそのまま滞在することになったそうです。

今は近畿大学で、日本人の学生たちに社会学を教えることができます。彼女はぼくたちの大学とすごく親しくしてくださっていて、先ほどもご紹介がありましたが、東海大学は日本に住んでいるブラジル人の方々のために、ポルトガル語での通信教育の教員養成講座をやっているんですね。200 人以上の人たちがそれを受講しているんですが、ポルトガル語の授業なので、インターネットを通じてブラジルの大学の先生に、ブラジルからインターネットで授業をしてもらっています。受講生の人たちは昼間仕事をしたあと、お家に帰ってから毎晩夜遅くまで一生懸命大学の講座を勉強しているんですが、そういう人たちを集めて、年に 6 回皆が集まってスクーリング授業というのをやります。そのときに、リリアン先生とぼくとそれからあそこで赤い服を着ているシゲヨさんという方と、この 3 人で講師をして授業をやっています。あちらに田口先生がいらっしゃいますが、その田口先生とか、いろんな先生がたに協力していただいて授業を作り、われわれが講義するわけです。それでなんと 4 年近くにわたって、律義に律義にお休みの日になるとスクーリング授業に出てきていただいて、年に何回も授業をしていただいている方です。

今日は、彼女が滋賀のほうでずーっと長く続けている教育の活動、ブラジルやよその国から来た子どもたちを対象に行

っているボランティア活動のお話を中心に、日本に住んでいる外国籍の子どもたちのいろんな教育の状況についてお話しいただこうと思います。それでは皆さん拍手でお迎えください。(拍手)

## 1. 普通の家庭環境とは？ 日本とブラジルの間で

リリアン・テルミ・ハタノ どうぞよろしくお願いします。「外国にルーツを持つ子どもたちの今——子どもくらぶ『たんぽぽ』の取り組みから——」(レジメ)というタイトルを付けていただいています。私が活動しているボランティア・グループの名前が「子どもくらぶ『たんぽぽ』」なんです。

先ほど私の紹介というところで、もうすでにお話をさせていただいた部分はあるんですけど(レジメ:自己紹介)、まあ「普通」という言葉はよく使われるんですけど、「普通」というのは人によってかなり違うものです。私にとって「普通の家庭環境」というのは、2つの言語、2つの文化というのは両立するものである、それが普通だったんですね。ところが、必ずしもそれを普通だと思わない人たちと出会ったときに、いろんな衝撃だったりとかがありうる。この、私にとっての「普通」である「2つの言語、2つの文化」ということが、日本に来ている私と同じような、いわば私の後輩にあたる子どもたちにとっては「普通」ではなくて、親と共通する言語を持たなかったりとか、子どもは日本語しか話せなくて親はポルトガル語しか話せないといったような現状があるんですね。それが今、一番の私の課題とされているところで、こうした状況にすごく疑問を持っていますし、子どもにとってもそれが残念な状況があるということを一番の課題として思っております。

私が来日20年というと学生の皆さんほぼ誰でも20歳ぐらいの時じゃないかなと思われるでしょうから、おおよその年齢がばれるのでそこは強調してほしくない和前もって小貫先生に伝えておいたんですが、2回ほど言っていましたね(笑)。最初は幼児期に来たことがあります。そのときはなぜ来たかという、妹が生まれたときに持病がありまして、手術のために1年半ぐらい日本に来ました。母親は病院に看病のために行っていたので、私は2歳ぐらいにはもう保育園に入れられて、かなり早い段階でもう、教育の環境ですね、そういった勉強する状況におかれていた、入れられていたんです。

その次が大学に入学するときです。ブラジルの公立大学ですね、州立だったり連邦とかいろいろとあるんですが、そ

こに入れば大学に行けますよというのが私が小さいときから親に言われていたことでした。というのは、ブラジルの公立大学に入ると無料なんですね、学費が。日本にある大学は、東海大学も近畿大学もそうですけれども、学費が無料ということはないんですが……。つまり、公立大学に入れなかったら大学に行けません、その代わりに、入れたらご褒美として日本に2カ月遊びに連れてってあげるという、いわばエサですよ。だからモチベーションはそこにあったんですけども、そういうことで大学に合格したときに、両親がプレゼントとして日本に行けますよーということで来ました。

それで、そのときの印象がやはり……。皆さん、海外に行かれたことがある人ってどのくらいいますか？ ちょっと手を挙げてみて……。半分ぐらいですかね、ぜひ若いときに海外とかそういう経験をしていただきたいなーと思うんですね。私は18のときに来た日本の印象がとてよくて、この世に天国が存在するんであればそれは日本だと思うぐらいよかったですね。それはもう、チャホヤされてはおいしいものを食べ、絵葉書にある日本のいろんなところを全国回って、ということがあって、天国が日本であるのなら少しでも長くいたい！という思いで留学を、学部るとき、ちょうど皆さんと同じぐらいのとき、そうですね19から20のときに最初に留学経験をしました。

で、その留学のときに、天国であった日本が1週間ぐらいでイメージが崩れていくというような(笑)。やはり観光で旅行とかおいしいものを食べて行く日本と、実際に生活していくというのはやっぱりギャップがあったり、案内する親がいるのと、全部自分でこなさなければならぬものとのギャップはありましたけれども、イメージとは違ったわけです。まあ幸いに、ここにも留学生が何名かいらっしゃると聞いておりますが、やはりそのときにいろいろな国から留学してきた友達ができたりしたことはすごくよかったです……。

2回目の留学は、大学を卒業してから日本に来て、もっと専門的に、さきほど言った外国にルーツをもつ子どもたちの教育について研究し、現在に至っています。今は、ひとつは日系ブラジル人二世として、もうひとつは在日ブラジル人一世という2つのアイデンティティを持ちながら、日本で生活しているということです。

## 2. さまざまなルーツを持つ子どもたち

イントロがけっこう長くて申しわけないんですけども、これからちょっとクイズですね、イントロとして、つぎの子どもたちの共通点を皆さんにちょっと考えていただきたいんですが、20人ぐらいの子どもたちの写真をこれからお見せします。それで皆さんがこの子どもたちの共通点は何だろうということをお考えください（レジメ：次の子どもたちの共通点は何？）。……まあ、外見でというとかわいい子どもたちですよ、皆さんね（写真）。どうでしょう。どういう共通点？ 残念ながら当たっても賞金も何もないんですけど、これはじつはアメリカの子どもたちなんですけれども……どうでしょう。誰か挑戦してみませんか？

この子どもたちの共通点は、じつは全員日本にルーツを持つ子どもたちなんです、全員。もちろん、子どもたちは日本だけにルーツがあるというわけではなくて、なかには5つも6つもルーツがある子どもたちもいれば、2つぐらいのルーツの子もいます。だからこの子どもたちの共通点は、いろんなルーツを持つ子どもということですね。

たとえば有名人であればダルビッシュとかベッキーとか、皆さんはもっとたくさん知っているでしょうけれども、まず外見でその人が日本人かそうでないかというのは、もうわからない時代に入っている。さまざまな外見の子どもたちを、皆さんがどう思うか、受け入れるか。そういう子どもたちの居場所だったりとかを、どう思うか。これがひとつ、考えてもらいたいことです。

それからもうひとつ、実際に子どもたちについてお話する前に、どのぐらい皆さんがご存じなのか（レジメ：人の移動）、日本の港とか空港を通る人たちがこれだけ、5200万人というのは1年間でそこを出たり入ったりする人の数なんです。それで、日本に来る外国人と海外に渡る日本人、どちらが多いかということを知りたいと思うんです。日本に来る外国人のほうが多いと思う人、ちょっと手を挙げてくれますか？ あ、少ないですね。では、海外に渡る日本人のほうが多いと思う人？ あとはちょっとわからないという人ですかね、まあ、若干こちらのほうが多いようなんですけども、よく勉強されていると思います。944万人が日本に入ってくる外国人ですけれども、そのおおよそ倍ぐらいの1664万人の日本人が海外に渡っています。これはいろんなところで聞くとけっこう認識が逆で、日本に来

る外国人のほうが圧倒的に多いと思う人のほうがたいていは多いんです。皆さんはけっこう勉強していらっしゃるから、そうじゃないという答えが多かったように思います。これはもちろん出たり入ったりだけなので、長期の人もいれば数日という人もいますが、そういう動きがあるということですね。

次に、これは見たことがありますか？ 留学生はたぶんこういうのを持っているんですけども、外国人登録証明書（レジメ）という、これは私の古いものです。今は在留カードに変わりましたが、こういうカードを持っている外国人の数に関するデータがあります。

それがこれなんですけれども（レジメ：日本社会の多文化状況）、まあ、こういうデータはどこでも見られるのであまり詳しくはやりませんが、いずれにしても一番多いのは中国（67.4万人；32.5%）、それから韓国・朝鮮（54.5万人；26.2%）、ブラジル（21.0万人；10.1%）——ブラジルがまあ3番目に、でもたぶん今年はフィリピンと逆転するのではないかとはいえますが、それから、その他で180カ国からの人（20.1万人；9.7%）がいる、まあ、ある国は1人しかいない、ある国は何十万という感じなんです。あともうひとつ注意していただきたいのは、その国籍数は190カ国、ほとんど国連加盟国の数に近いんですけど、あと無国籍でどの国籍も持たない人たちもおおよそ1100人（0.1%）ぐらいいるということです。（2012年12月末現在では、中国65万2555人、韓国朝鮮53万46人、フィリピン20万2974人、ブラジル19万581人であり、ブラジルは20年以上維持してきた3位をフィリピンに譲ることになった。）

それで、神奈川県はどうなのかというと（レジメ：神奈川県外国人登録者数）、東京に次いで多様な地域なんです。だから皆さんは、いろんな人に出会う機会があるという意味ではすごくいい環境ではないかなと思います。まあ神奈川県だけでも無国籍が178人いるということで、それを多いと思うか少ないと思うか、いろんな考え方があると思うんですけども。

## 3. ブラジルから日本への逆移民

このへんはサラッとやります（レジメ：在日ブラジル人の急増）。さきほど私の母親の話がありましたけれども、移民について学校教育で勉強してきた人ってどのくらいいますか？ 移民について——ちょっと手を挙げてくれますか、移民、い

ない？ あ、そうですか。何気なくさっき自己紹介したけど、日系人って何？ と思ってる人もいるのではないかと思います。

皆さんはバブル期というのは体験してないんですけど、80年代の半ばにブラジルで発行している日本語の新聞に「(日本に) 仕事に行きませんか」という感じの広告が載りはじめるんですね(レジメ: 在日ブラジル人の急増)。いちばん最初は1985年で、説明会を聞くだけで1000円くらい支払っていたそうです、日本に働きに行くということで。

このような広告で(レジメ: 募集広告)、富士山を載せた、まさに富士山はこのキャンパスからでも見られるんですけど、各地でそういう説明会があって、2~3会場行けば3000円もらえるというような、へたなアルバイトよりも(笑)というような感じがあったんです。まず募集があったということですね、そこをやはり見落としてはだめだと思うところで、まあ、そういうような仕事があった。それと、あとブラジルの事情。ブラジルで勉強しても仕事がないとか、プッシュする要因とプルする要因がブラジルと日本双方の間にあったということです。

それで、法律(出入国管理及び難民認定法)が1989年に変わって、89年の14000人からどんどん倍増していってます(レジメ: 在日ブラジル人の現状)。すごく短いスパンでどんどん増えていく。最高が2007年で、31万人まで増えたんですけど、そこからずーっと減ってきています。外国人の総人口は3年連続で減っているんですね。

さきほど移民という話があったんですけど、20世紀初頭に、「さあ行こう 一家をあげて 南米へ」というような募集にね、海外に渡るという、これが移民の話なんです(レジメ: 海外集団移民)。これじつは、こういう話はだいたい半年かけて勉強するのでここではサラッとやりますけど、ブラジルに関しては、移民が始まってから100年過ぎているということです。

それから「日本社会の縮図ともいえる学校で外国にルーツを持つ子どもたちはどのような状況でしょうか？」(レジメ)ということなんですけれども、お配りしたチラシの内容に間違いがあって、申しわけないんですけどちょっと訂正させていただきたいんですが、チラシの裏のですね、ひとつは「日本の公立学校に通う子どもたち」がいて、あとはブラジル学校——神奈川、厚木にブラジル学校がひとつあるんですけども、その「ブラジル学校に通う子どもたち」のところで各種学校(朝鮮、中華、インターナショナル)と同じくらいの学校

が今は15校あります。

#### 4. 「たんぽぽ」の子どもたち

「ブラジル学校に通う子どもたち」と「どの学校にも通わない子どもたち」「日本の学校に通う子どもたち」がいる(レジメ: 在日ブラジル人の子どもたち)と、大きく分けることができます。いま現在は、「たんぽぽ」——こう省略しますが——の子どもたちは、日本の公立学校に通う子どもたちが圧倒的に多いです。2人ですね、今ブラジル学校に通う子どもたちは。うち1人は、ついこの前までは日本の学校に通っていた子どもです。どの学校にも通っていない子どもたちというのは、今まで私はいろいろ出会っているんですが、今日現在そういう子どもたちとの接点は少なくなっています。部分的にちょっとお話はさせていただきますけれども。

子どもくらぶ「たんぽぽ」(レジメ)というのはどういうところなのかというのを——やっとなら本題に入りますけれども、設立は、私が皆さんと同じように大学の院生だったころに(皆さんは学部生が多いと思うんですけど)、そういう子どもたちとの接点を持つために地域ボランティアとかいろんなことをやりたくてですね、大阪の豊中市というところがあるんですけど、その国際交流協会に「子どもメイト」というグループがあったんですね。そこに、たとえばこのぐらいのスペース、もうちょっと狭いですがね、この2つのテーブルのずーっと最後まで行ったぐらいのスペースに、週に2回子どもたちを集めて勉強をみてあげるということをしていた。月1に——そのときは中国帰国者という子どもたちが多かったんです。その中国帰国者のお孫さんですね(さりげなく中国帰国者って言いますが、それを全部説明していくと時間が足りなくなるので、また勉強していただければと思いますけども)、その子どもたちが月1で中国事情、中国のことを勉強する日がありました。そのときにそのグループには1人ブラジル人がいるということで、そのブラジル人の子どもに中国事情の日にはやっぱりブラジル事情とか、ブラジルについて話す機会があればということで友達に言われて関わったんですけど、そこがすごく私にとってはよかったというか、いろいろと考えさせられたんですね。

たとえばこの部屋ぐらいのスペースで、最初はばらばらに点在している子どもたちが週に2回集まって出会うんですね、中国語でいろいろと話したりとか。初めはこの部屋の入り口、

ここから子どもが入ってきて壁沿いに歩いていったのが、半年くらい経つと真ん中に行ってみんなにあいさつしたり、明るくなっていく。中国語を話す場があるだけでもほんとに子どもたちが明るい、明るくなっていくんですね。シュンとしておとなしくて肩身を狭くしているような子どもが、ほんとに数カ月するとみんなと友達になって明るくなっていく様子が、これはいいな、と。私は中国語が残念ながら全然できないんだけど、そういう場所ができればいいなと思ったんです。

そのとき私は滋賀県で、以前から日本語を教えたりとか、先生にポルトガル語を教えたり、ほかのいろんな団体のお手伝いをしていたんですけど、そういう場を仲間と一緒につくったらどうかと、滋賀県はブラジル人が多いのでつくれたらなーということで、「オリーブ」というグループのいろんなスタッフに呼びかけて立ち上げようよと……それが1999年です。

さきほど20年日本にいて言いましたけれども、その子どもたちの活動を始めてもう今年で14年目になります。子どもをサポートする活動というのは、大人には事情があってやめなければならないって言えるんですけど、子どもはそんな事情なんて関係ないですよ、なんでやめるの？ というような。それがいつの間にか、もう14年ずっと週1で活動しています。就職してからもなんとかそれを確保できているんですけど、曜日はけっこう変えてるんですが、なんとかやっています。

対象は小学生から中学生、義務教育の年齢の子が中心のメンバーですけど、でも小学生にその弟とか妹がいたりとか、卒業していった高校生とか大学生になってから来たりする時期もあったんですけど、今は6歳がいちばん下かな。小学校に入るちょっと前から来ている子と中学生までの、中学生はいちばん上でいま中2ですね、まだ受験年齢ではないという時期です。

## 5. フワフワ飛び、深く根をはるタンポポの花

場所は、この公設民営というのは、公民館みたいな、こちらでもそういう場所あると思うんです、公民館みたいな場所であるけれどもそれぞれのボランティア・グループがその鍵を持っている。だから私たちが管理できる、トイレ掃除をしたりとかあるいは地域の人との接点を持てる、場所としては非常に面白いところで、地域通貨でも有名になったところでもあるんですけど、まあそのへんの話はこの程度にし

ておきます。

なぜこの名前、子どもくらぶ「たんぽぽ」か？ なんで最後の「ポ」はカタカナかっていうのは、これはまちがいでなくて、私がポルトガル語教室をやっていたのを、就職してからは何日もボランティア活動をできないので、全部吸収合併したというところでポルトガル語という意味の「ポ」ですね。あと、滋賀県には「たんぽぽ」というグループが3つあって、全部違うことをやっているんですけど、どの「たんぽぽ」か区別するためにもいいかなということもありました。

なんでたんぽぽかというのもちょっと由来というか思ったことがありました。タンポポというのは皆さんご存じのように、このお花、ここにあるすぐすぐすきなポスター、これに合うような話をしないとだめなんですけども、タンポポの花ってフワフワ飛んでいきますよね。子どもたちはずっと同じところにいるのは望ましいことじゃないんです。子どもたちにとってはそれぞれの自分のいるべき場所に、自分のスペースを獲得するために飛んで行ってほしい、自立して飛んで行ってほしいという思いがあってつけた名前なんです。でも、花が飛んでいくだけでなく、飛んできた花もあって、気がつけば14年が経っていた。「たんぽぽ」のような活動が必要ない状況に社会が早く変わってほしいと思っているんですが、思いのほか長く続けることになっています。それとあとで聞いたのは、タンポポの花というのは根が深いんですね。根が深いからずっと長く続くという。「ネーミング」にちょっと失敗したかなというような面もあるんですけど……。まあいずれにしても、さまざまな子どもたちに、いま多分110何人かな、統計はとってないんですがいろんな子どもたちに出会っています。

## 6. 「たんぽぽ」の活動

それで、どのような活動をしているかというのは（レジメ：主な活動内容）、今はこの〈継承語＝母語教室〉、継承語というのは本来親から子へ継承するはずのことばですね、母語ともいえると思うんですけども、ただ残念ながら親との共通のことばが話せない、つまり（保育園に始まる）日本の学校へ行きはじめると、もう親との共通のことばが話せなくなる、というか話さなくなる、そういうことなんです。私はポルトガル語を担当して教えているんですが、あとは塾のように算数だったり数学、理科、社会、子どもがわからないことを持ってきて教えたり（教科補充）、あと、〈子どもの放課後の居場所〉

ですね。日本って子どもがお金を使わないでいられる場所というのは、特にこの寒い時期にいる場所って意外と少ないんですよね。活動を立ち上げた当初は、寒いときに公園に行っただけでは——いま考えるとけっこう怪しいことをやっていたんですね、「こういうところがあるんだけど、遊びにこない?」とか誘ってるんですよね(笑)。学校が終わってから子どもたちがたむろしていると近所の人は文句を言うし、だからといってゲームセンターへ行ってもお金がないとつまらないし、ということで暖かくて安全な場所を提供しながら子どもたちともコミュニケーションがとれる、そういったような場所をつくりたかったというのもあって、子どもの放課後の居場所ということで始まりました。

あと、日本語が当初まったくわからない子どもというのは、まさにパラシュートで——ブラジルから日本へ飛行機で飛んできて上空から日本の学校に落とされ、ある日突然日本語だけの環境に入れられるようなもので、やはりそれはしんどいですよね。いちばん最初に活動を立ち上げたときは——今でも私のこの携帯の番号はずっと一緒なんですけども——ほんとに荒れた子どもたちがいたんですが、そのときに持ちはじめた携帯なんです。私の携帯は、たとえば警察から電話があったりとか、ほんとにヤンチャな子どもをかかえて手放せなかったりとかで、そういう荒れた時期の子どもたちがけっこうたくさんいたときだったんです。その子たちがやっぱり(日本語がわからないから)日本は楽しくないということがあったので日本語を教える、〈日本語指導〉をするようになりました。今はもう完全に様変わりして、日本生まれ日本育ちの子たちなんですけれども……。そういうことで、いろんな子どもたちに出会うごとに、その子に合った、自分がほんとうにやりたいこと、それからとにかくその子が前向きになれることはなんでも、なんでもというか、やれる範囲ではやってきたつもりです。

あと最近では〈社会見学〉、親がほんとに仕事で忙しくて、自分の子どもをたとえば週末にどこかへ遊びに連れていきたくてもそれができない、といったようなこともあるでしょうから、そういった子どもはいろんなものを見たことがないということで、たとえば休みの日にどこかへ連れていったりとか、簡単なプラネタリウムだったりとか、いろんなところへ連れていったり、博物館とか、本物を見てもらうというようなことですね。

あとは〈地域への情報発信〉などもしています。無料で使える会館もあるんですけど、そういうところではなくて、あえ

て地域の人やいろんな団体が使っている場所をお金を払って使っています。この地域にこういう子どもたちがいますよというような、あえて何かを発表するわけではないんですけども、活動と存在をとおして地域の人にアピールしていく、慣れていってもらって、子どもたちも地域の人たちと接することに慣れていくような環境をつくる、というようなことをやったりしています。

今までの取り組みをいくつか紹介したいということなんですけれども(レジメ:今までの取り組みの概要(1))、神奈川県はたぶん全国でいちばん——ここ神奈川県の高校の先生たちはすごくがんばって、一生懸命多言語進路ガイダンスを、「高校へ行くための進路ガイダンス」というのをやっていたんですけど、そういう取り組みは滋賀にも大阪にも全然なかったんです。そこで、私たちのグループでは親たちに「高校ってお金かかるんですよ」とか「受験ありますよ」と説明することをやったりとか(2001年)、あと、その当時、立ち上げた頃は元気な子、特に男の子は元気で、エネルギーはもうありあまっているのでカポエイラとか、〈カポエイラ教室〉ですね、格闘技でもあるし踊りにもなる、そういうカポエイラ教室を開いて(2001)そのエネルギーを使うというような、ね、いろんな人と接点を持てるような関わりをやったりしています。

あと日本語がわからなくて教科書を読めない子が、1つの漢字を調べてそれで今度は意味を探すという作業はもう大変な労力なので、そのときは助成金をもらって(2001年)、これも大変だったんですけども、小学校4教科と中学校5教科(国・理・社・数・英)の、全学年の教科書にすべてルビを打ってですね、中学校2-3年生の社会なんかそれはもうすごい漢字の数です。そういうルビ打ちを全部やって、今度はそれをコピーして子どもや学校に渡したりとか、少なくとも先生がたとえば「読んでください」と言ったときに一緒に読めるとか、何かクラスでの活動に共に参加できるようにとの思いで、はたしてどのくらい効果があるのかはかなりのハテナですけども、まあ、でも子どもたちにとっては、なかには役に立つものもあるのではと期待しつつ、子どもたちにコピーを渡したりしていました。

それから、ブラジルに行ったスタッフがいたので、その体験を地域の人に紹介したりとか(2002年)、ブラジルというのはこういう国でというような話をしたりとか、あと、皆さんにとって受験というともまあ高校受験もたいへんですが、たぶ

ん大学受験というのがいちばん真っ先に念頭に浮かぶと思うんですけど、外国籍の子どもにとって高校へ行くということはまだまだ厳しくて（レジメ：今までの取り組みの概要（2））、たとえば日本の学校で勉強して今の皆さんみたいに大学生であるということはすごい努力、がんばってきたんだなと思うんですけど、本当にその前の段階で挫折する、能力はあるのにあきらめてしまっている子どもたちが本当にたくさんいます。高校進学について神奈川県には枠があるんですけど——特別選抜ですね、やはり滋賀にはありません。ですから私たちは高校入試特別措置を実施してくれないかとか、特別枠を設けてくれないかと陳情したりして（2003年）……ほんとは最初は請願にするつもりだったんですが、それですと一度断られてしまうともう絶対にあと何もしてくれなくなってしまふそうなので、それはちょっと控えてですね——そういった活動はほんとに小さな働きかけで、もちろん圧力団体とは全然違いますし（笑）、それはほんとに小さな、自分たちの向き合う課題をひとつひとついねいに扱って、それをどこかに投げかけるといったような活動をやってきました。最近はそのままで積極的にできていなくて、毎週の活動で手一杯のような部分はあります。残念ながら高校進学の特別枠は今もまだありません。

それと映画ですね（レジメ：今までの取り組みの概要（3））。『ヘンニムの輝き』（2006年）という、神奈川の多言語保育園のですね、地域はちょっと忘れちゃったんですけど、その保育園のドキュメンタリーだったんですけど、とてもよかったのでその上映会をしたり、地域の人にもっといろいろな外国人のこともブラジル人のことを理解してもらうためのイベントを開催したりしました。あと、最近いちばん印象に残っているのは、ポルトガル語の演劇で、それは子ども自身が自分で脚本を書いて自分たちで演技をするというのをクリスマスにやったんですね。『サンタさん、大ピンチ』（2007年）という演劇だったんですけども、そういうようなことをやって訳すのを手伝ったりとか、そのときどきの子どもたちと共にいろんなことをすごく楽しくやってきています。

## 7. 「たんぽぽ」の現状と課題

いま、直面している課題として思うことはですね、まず「二世の増加」ということで、まあ、二世の増加自体は課題ではないんです（レジメ：子どもたちの現状と課題）。それは当然

の結果なんですけれども、私は一世であり私の子どもは二世ですよ。在日ブラジル人二世になるんですが、そういう日本生まれ日本育ちの子どもが増えてるんですけども、残念ながら長時間、たとえば12時間から15時間仕事をしている親がいるとすると、その子どもたちはほんとに親と話す時間が少ないので、話す時間が少ないから「母語＝継承語」が育たないということもあったり、日本の学校もその母語のところの認識が浅いというか、あるいは、いろいろな多文化であるということが必ずしもそれがプラスとして認識されていなかったり、ということで子どもたちが親との「共通の言語」を失っている状況が今いちばんの大きな課題だと思います。今、高校生・大学生という子どももちろんいますけれども、「たんぽぽ」の今の二世というのは中学生ぐらいですが、これからますますコミュニケーションが必要になってくる年齢なのに、親との共通の言語を持たないというのは、これはけっこう大変だと思うんですよ。子どもがたとえば悩みを持っていて、それを言っても親が「え、もう1回言って、もう1回言って」というふうだと「あ、もういい」ということになっちゃうんですよ。「もう、めんどくさい」となっちゃって、そういう家族というのはやはり課題が生じてくるでしょうね。

あと「家族の分断」です。いろんな分断があって、もともと家族の一部がブラジルに残っている、というのがあります。それから、こちらに来ていたんだけど、教育のことをいろいろ心配して、子どもだけ送り返したという家庭もあります。子どもは日本で生まれたんだけど、お父さんだけが日本に残って、お母さんと子どもがブラジルにいるということもあるだろうし、両親だけ日本に残って子どもはブラジルでおじさんとかおばあちゃんとかに育てられている子どももいますし、最近のパターンはこれも当然の結果とも言えるんですが、日本で育てている子どもがブラジルのことを外国であるかのように思ってしまう、しょうがないので子どもだけ残って両親だけがブラジルに帰ってしまう、というようなことですね。グローバル化した社会だからそういう家族の分断が起きても当然と言えば当然なんですけど、さまざまな事情でやむをえずということになると、いろんな問題があるかと思います。

私が思うもうひとつの課題は、「子どもが親の言語・文化を否定しないような環境づくり」というのがもっとあってもいいんじゃないかなと。肯定的にですね。たとえば私が、私の両親は日本人ですけども、私は親が日本人であるということ

を何かそれは悪いことであるとか、隠さなければとか（まあ、この顔に出ていますね）隠さなければならないなどと思ったこともないですね、ブラジル育ちながら、そういう、外見がアジア系だと、日本へ来たりしたときに、隠したりとか隠さなければならないというふうになったりする状況というのはどうなんでしょうか、ということですね。

もうひとつはやっぱり親＝保護者が教育熱心ではないとか、いろんな研究もありますけれども、保護者が保護者としての役割を果たせない環境が現実としてあるのではないかと、ある研究では「顔の見えない定住化」と言っていましたけど、ほんとに顔の見えないような生活、付き合いもまったくなく月曜から土曜までずーっと工場です仕事をして、週末だけちょこっと地域のスーパーで買い物をしたり洗濯とかで1週間が終わってしまう、そういうような状況というのはどうなんだろう、と。

## 8. 外国人が日本で使う「通名」と本名

私の専門というか博士論文では名前について研究したんですけれども、ちょこっとそれを紹介したいと思います（レジメ：「本名」「通称名」とアイデンティティ）。私はあえてカタカナで「リリアン・テルミ・ハタノ」と使っていますが、長いんですよ。いちばん最初にもらった給与の明細書は「リリアン・テルミ・ハ」だったんです。タノが入らない。で、それにひとつひとつ交渉して「なんでタノが入らないんですか!」というような感じなんですけどもね。まあ、日本名ではない名前と呼ばれることに慣れていない子どもたち——今「たんぽぽ」に来ている子ども——、実際に自分の本名を母語で書けない、知らない、というようなこと、あるいは親の名前も知らなかった、書けない、とかいったことが少なくないんです。普通に考えると「えっ?」と思うんですけれども、親がどこで生まれた、ブラジルはどんな国か、といったことのまったくイメージがない子どもたちがけっこうたくさんいます。

そこで民族というのか、そのへんは話が日系人となると難しいところなんですけど、いずれにしても「民族名」というのがどこにも正確に登録されてない状況があったりとか、自分の本当の名前が書けないというのは、普通は考えられないですね。でもそれが普通に起きているということです。それで、歴史背景は異なるんですけど、旧植民地出身者の「本名」と「通名」の問題というのがありますけれども、通名で生活している在日コリアンとかたくさんいますが、日本の名前を名乗っ

ていてこういう顔だったら日本人だとしてみんな周囲は思っていたりするけど、じつはさまざまなルーツを持つ人たちがいます。そうであるのに、ブラジル人の子どもたちもけっこう「リリアン・テルミ・ハタノ」という子が「ハタノ・テルミ」になっちゃって日本以外のルーツが隠されてしまったり、まったくポルトガル語も話せなくなっていく……。親のなかには泣きながら話す親たちもいたんですけど、たとえば「スーパーと一緒に歩くんだけれども、なんか私がポルトガル語で話しかけると子どもがフツと私と話してないフリをするんです」「すごく寂しかった」というような体験をしている親ってけっこういるんですよ。そういうようなことは、やはりアイデンティティ形成期の子どもたちが自分のルーツに誇りや自信をもってアイデンティティを形成することが容易なものではない環境があるんですね。

かつては創氏改名というような時代があったんですけども（レジメ：「本名」「通称名」とアイデンティティ②）、今はまったくそのようなことは昔のように制度として行われてはいないんですけど、でも結果的にそうなっちゃってる。スペースがないから省略するとか、そういうようなことはどうなんだろうか? ということですね。幸い私の名前は「リリアン」という、LとRはちょっと違うんですけど、まあそこへんはそんなに違和感はないんですけども、でもスペルの違いによってたいていは英語読みか日本語読みですね、日本語読みになってしまうのでその発音がけっこう違う。たとえばちょっと古いんですけど「ロナルド」という選手がいますよね。ほんとにポルトガル語読みだったら「ホナウド」なんですよ。そうすると、「ホナウド」という名前の子供が、日本の学校に入ると「ロナルド」と登録されて、そう呼ばれるようになってしまったりするわけです。

名前をめぐるこうした状況がある中で、子どもたちは、自分のルーツに向き合うということが、そういう機会がないままにいる、だから「たんぽぽ」の中、少なくともそのクラブの中でその名前を書けるようになるとか、その名前で名乗って聞いても違和感を覚えずにすむようになっていってもら。それを学校で使うかどうかはまた別の問題としてありますけれども、隠したいとか名乗りたくないというようないろんな思いがあるのでそれは別としても、少なくともそういう場所を提供するというのはいいのではないかとということで取り組んだりしています。

つぎに、「地域」で「見えない」子どもたち(レジメ) っていういろいろありますけれども、多様な文化背景を持つ子どもたちが置かれている状況って意外と見えにくくなっているんです。さきほど、日本にいる外国人のデータがあったんですけど、8割近くがアジアとか中南米、それから私みたいな日系人とか、だから外見ではわからない。となると、「最近はけっこう外国人が増えたね」と言うけれども、じつはその印象以上にアジア人の割合が高い。意外と外見では分かっていないんですね。

そしてやはり、子どもたちの最大の利益というのはどのような環境なのか、そういう環境づくりというのをやはりもっともって考えていかなければならないのではないかなと、いつも問いかけています。

「人権」ということばは、けっこう何か過剰に反応する人もいますね。今まで私の学生は、たとえば人権教育といったときに何か怒られたみたいなの、何か暗いイメージがあったみたいです。そういう発想それ自体が少しおかしいんじゃないかなと。だから今までの人権教育のやりかた自体もまずかったんじゃないかと、しっかりとやっぱり人としての基本的な人権だったりということもやはり、それを守っていく環境というのはみんなにとっていいはずなので、そういうところの再検討も必要だと思っていますが、なかなかここは難しい問題に入ってくるのではないかなと思っています。

教育の問題設定はいろいろとあるんですけど(レジメ:教育のあり方の問題性)、さきほど、今「たんぼポ」では一番上が中2の子と言いましたけれども、ほんとに無事に高校へ行けるのかなと……、日本生まれで日本しか知らない子どもなんだけれども学力的にしんどい。ちょっと前までは、平気で中学校の先生から「あなたの行ける高校はないよ」というふうに、はっきりと先生に言われる子どもたちがたくさんいたんですね。今はまあ少子化で定員割れしている学校があるから、行ける学校は何か出てきている、たとえば定時制高校だったりとか。でも行きたい学校と行ける学校のギャップだったりとかがあります。その子の学力の問題というのはどこかにとりわけ要因があるのか、そのへんの調査はしっかりやっていないんですけど、やっぱりここは母語の関係が影響しているのではと——まあそれはきのうの別の研究会でバイリンガル教育——母語教育の授業設定とか、そこに影響しているのではないかなと思ったりしています。

やはり豊かな人間性というのは教育の中で形成されるもの

で、教育の役割というのは非常に大きいと思うんですけども、人間関係を大切にしていって教育とか生活というのはどのようなものなのかとか。あと、日本語教育の取り組み方として——ここは日本語教育の先生がいらっしゃるの言いにくいんですけど、「同化」しない日本語教育]つまり日本人にする教育じゃない日本語教育というのはとても大事で、それはどういうことかという、私に言わせていただくと他の文化を否定するような「なによりも絶対的に日本語が重要」だとするものではなく、たとえば自分の文化と自分のことばは「次に大事」というものではなくあくまで「同等なんだ」と、つまり各々の母語も大切にしながらする教育、そういうような日本語教育というのがやっぱり大事だと思うんです。けれども、現実には教育を受けて日本人になっていく(同化していく)というのはどうなんだろうかと。ということです。

ですからやはり母語の(日本語への)置き換えではなく、母語を土台に日本語を学んでいくような状況をどう作り出していかということですね。

## 9. 社会・学校の在り方

このへん(レジメ)の「無関心」だったり「無感情」とか「無意識」というのがつねに弱者を生み出していくというのは、どの社会もそういう傾向があるんですけども、そういう社会構造を変えていかなければならないんじゃないかというところですね。

当然ながら、切り捨ててもいい人間は存在しないんであって、無視してもいい人間というのはあってはいけないことで、それを黙認する——「わたしの問題じゃない」というような、あの子は日本の学校にいるけれども誰も話さなくてもいいということではないんです。「たんぼポ」で今まで何人もいましたけれども、だいたい夕方なんですね、4時半から5時ぐらいに来るんですけども、5時まで誰とも話さなかった、先生とも話さなかったという子どもがけっこうたくさんいたんです。「えっ、学校に行ってたんでしょ？」と聞くんですが「誰も話してない」というような状況というのは異常だと思うんですね。初期の「たんぼポ」の頃の子どもですが、「学校へ何しに行ってるの」と言うと、「椅子をあたために行ってる」って言ってね。「椅子をあたためるの疲れた」と子どもがポロッと言うのは、ちょっと疲れたじゃあないんですね、そうとう我慢しているのがポロッと出たんだなあ……。「学校に行きたくな

い」と言ったときにはもう遅いんですよ。もう、すごく溜まりに溜まったストレスがあって、「もうぜったい行かない」と言ったときにはもう、何してもどう説得しても行きませんね。そういうような子どもたちはたくさんいましたけど、今は幸いというか、学校はそれなりに楽しく行けている子どもたちですけど、当初はそうではなかった。みんな当初は13くらい、小学校で学校をやめていった子もいますけれども、小・中学校でやめて、今は景気が低迷しているとか難しいということなので、でも13から14で、滋賀県だったら子どもが工場ですら仕事をしてたんですね、工場のラインで仕事をするんです。私はけっこう怒ったり説教するので、「何してたの?」と子どもに言うと「いや、家にいた」と。でも、子どもの手が子どもの手でなくなっていくんです、ゴツゴツしてくる、工場ですら仕事していると。そういうような子がたくさんいて、早い段階で親になって——いちばん私の体験でつらかったとか強烈だったのは、14歳の子が12-13歳で仕事をしはじめて、妊娠して14歳で親になった子ですね。その出産の立ち会いの通訳をした経験というのがそうなんですけど、この社会のシステムは14歳の子が子どもを産むという体制になっていないので、もちろんそこにいろんな無理がでてくるんですけども、そういうような状況が当初はあったんです。最初から順調にスタートしてすぐに軌道に乗ってと思われるかもしれませんが、そんなことはなくて、いまは当時とはまた違う課題にいまは向き合っていかなければならない、というところですね。

さきほど言った多様な「民族名」、多様な名前を名乗れるような社会づくりはまだまだ必要ではないかな—とっています。ですから、さきほど言った「リリアン・テルミ・ハ」、いまでも明細は「リリアン・テルミ・ハ」かあるいは「リリアン・ハタノ」のように省略しないとだめだと、おかしいんじゃないかなと……。この話はよくするんですけども、靴を買いにいった足に合わせて靴をかうか、靴に合わせて足の指を切るかという話なんですけど、足の指は切りませんよね。それに合わせて名前を変えるというのは、いまはスペースを作るなんているのはもう、チョチョイのチョイでできるはずなんですけど、「いやお金がかかる」とか言って、いろいろとそこで「じゃあ、名前に価値はないのか!」というような感じになるといくらでも議論のできるどころなんですけども、まあそこを妥協しながら交渉をするんですけど、いちいちそこまで子どもたちがやるかといったらそれはやりませんよね。力関係——校長

先生と子ども、先生と子どもの関係で、子どもが交渉できるかといったらできませんよね。先生から「これでいい?」と言われたら子どもは「ん、ハーイ」という感じで終わってしまうので、まあ難しいところですね。

やはり客観的にみれば、外国にルーツを持つ子どもたちが多様化しているということに対する向き合い方については(レジメ: 深刻な教育問題)、社会システム自体をまだまだいろいろと改善していかなければならないところがあると思っています。あと、外国籍の子どもというのは義務教育の対象にはなっていないので、学校をやめても許されてしまうというようなところでできてしまう不就学の子どもたち、たとえば、5年、6年、学校にまったく行ってない子どもたちが日本社会にいたら、これは問題ですよ。学校に行っていないということ自体で子どもが犯罪に走ってしまうということではなくて、どういう人に出会うかですね。プラプラしているというような状況でやっぱり危険な状況に置かれるということが十分考えられるので、やはりこれは積極的に取り組まなければならぬ課題じゃないかなと思っています。あとやっぱり希望を持ってなくて行きたい学校に行けない、たとえば東海大学みたいな大学に行きたくても行けないという子どもたちがいるとすれば、やはり子どもたちの夢の持ちかたですね、こうなりたい、ああなりたい、という夢をあまり持たないで育てている子どもたちというのは、日本人にもそういう子がいるかとも思いますけども、まあ、学校へ行くのがすべてじゃないと言われればそれはそうなんですけど、ただ、(日本では)およそ95パーセントの子が高校を卒業していく社会であるとするれば、高校までは卒業しておかないとやっぱり不利になってしまう。どのような選択肢があるかという問題になる。やはり多様な子どもたちの可能性にもっと投資してほしい。地域の財産としてもっと積極的に受け入れていく、もっときちんとしていくというような意識改革が必要ではないかなと思います。

## 10. 外国籍の子どもの「教育を受ける権利」

「継承語=母語教育の保障」と「学力保障」、それと「進路の多様性の保障」ということはとても大事だと思っているところなんですけど(レジメ)、世界人権宣言(26.1)では「すべて人は、教育を受ける権利を有する」としています。ところが、これはあとでまた勉強してくればいいんですけども、一

方、日本の教育基本法（4.1）では「すべて国民は……」になっているんですね。「すべての人は」と「すべての国民は」という違いがあって、この場合の国民というのは日本国籍を有する＝持っているということで、「……教育を受ける機会を与えられなければならない……」（4.1）というようなところ難しいことがたくさんあるんですけれども、このへんの違い。不就学の問題というのは、こういう姿勢に原因があるのではないかと。

あと日本国憲法（14.1）も「すべて国民は……」で始まり、いろいろと書いてあって「……差別されない」というようなことが書いてあったりしますが、同じ日本国憲法（30）は「国民は法律の定めるところにより、納税義務を負ふ」というんですけど、税金関係の法律では納税義務者には外国人も含まれているんですね。ここ14条のほうの「すべて国民は……法の下に平等であって……」（14.1）、平等に扱うというところですね、法の下での平等というのはすべての国民なんですけれど、ここ（14.1）での「国民」というのは日本国民、でも納税義務（30）に関しての「国民」は外国人も含まれる。だから、不思議?? なんですよ。同じ日本国憲法の中に「国民」の解釈が2つある。ひとつ「法の下での平等」については外国人が含まれない、ひとつ「納税義務」については外国人を含める、というのはちょっとご都合主義じゃないかなというところですね。でも、それをどうするのかということはいま、参政権のある皆さんが考えて決めていかなければならないことなんですけれども。

さきほどお見せしたいろんな子どもたちもいますけど、そういう子どもたちをどう意識してこの社会を築いていくのか、という問いかけはずっとしていきたいと思っています。

その他の問題はたくさんありますが（レジメ）、よく聞かれるのはブラジルに帰るのか帰らないのかという質問ですね。子どもはそれはわからないですよ。でもそういう問題じゃなくて、日本にいる間はしっかりと勉強できるような環境をつくっていく。帰るか帰らないかを一番に問うのではなく、日本のことをしっかりと勉強してもらえればそれは日本にとってもいいことのはずです。そして、これから外国人をどう受け入れていくか、その家族も人間として受け入れていくのか、そういう政策ですね、依然としてまだまだきちんとしたものは見当たらない。管理の部分があります。去年の7月9日に導入した在留カードはすごく厳しいことを言っていますが、いま海

外に行かれたときに外国人の場合は、まあ私は一般永住資格を持っているんですけど、毎回日本に帰ってきて日本に入るときに、指紋と写真。それでそのときだけポルトガル語で「ようこそ」って書いてあってね。なんか、せつかくさわやかな感じで旅行して帰ってきたのにムカムカーっと、胃の中に何かこう、ちょっと気分的にムカついて「なんでこう、外国人だけがテロリストかそうじゃないか確認しないとだめなのかな」というようなのは、やっぱり疑問を持ったりしますけれども、これも参政権がない外国人はなんとも言えないところで、皆さんにやっぱり考えてほしいと思います。

この写真の子はブラジル人の子どものなかで私がいちばん衝撃を受けた子なんですけど、誰か知っていますかこの子を？（photo）見たことある？ ま、皆さんはまだ生まれてない当時のことなので、あ、生まれてる？ 生まれてるか、生まれていますね。彼はですね、エルクラノ君といって本もありますけど、1997年に愛知県小牧市で外人ということで襲撃されてリンチされたんですが、20数人の日本人少年たちに金属バットや木刀などで殴られて、バタフライナイフなんかで切られたり刺されたりして、その3日後だったと思うんですが病院で意識が戻ることなく亡くなってしまったんです。その家族と付き合いがあるんですけども、その親ですね。子どもを失って、その当時の警察は「よくあるふつうの事件だ」と取り上げなかった。だから民族差別なのか、外国人だからというような事件としては扱われなかったんですけども、加害者の少年たちも偏見とかはなかったと言うんですが、どうなのかということですね。彼のお母さんはブラジルへ帰ってから弁護士になって、今はブラジルで活躍されているんですけど、やっぱり法の限界とか法の怖さというのを経験して……そういう問題ですね。

最近多民族化の問題というのは、政権が変わってからどうするのかというのがありますが、どう多様化と向き合うのかというのがちょっとハテナの部分でありますけれども、やっぱり〈多民族・多文化共生社会〉（レジメ）の道というのはどうすればできるのかということですね。ここの研究所は積極的に活動されておられるようですし、皆さんも体験学習とかいろんなことを積極的にやっておられるようなので、やっぱり皆さん自身がですね、リーダーシップをとっていきような社会になればすごくいいことじゃないかなーと思っています。

じゃあ残りのわずかな時間なんですけど、ぜひ質問を受けさせていたきたいと思います。ご清聴ありがとうございます。（拍手）

**司会** 先生どうもありがとうございました。それではせっかくだからです、あと残り時間わずかですけども、ご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか、どうぞご質問のある方挙手で。あ、じゃあお願いします。

**質問者 1** 文明研究所でも長いあいだ大事だと思ってきた問題をですね、先生の体験にもとづいてお話しただいて、私もほんとうに勉強になって、ありがとうございました。とても多くの問題がですね、どんどん出てきて、いろんなところで質問したいなと思ったんですけども、私が独占してはいけませんと思いますので、3つだけちょっと簡単にお答え……いだけないような問題かもしれませんけども、伺いたいなと思ひまして。まず、最初チラッと出てきた1989年——1980年代の後半ぐらいから多くの外国人の労働者といひますか移民が増えてきた、その背景のなかのひとつに出入国管理法の改正があったということでした。私もこれ、かつて勉強したような気もしますが詳細はもう忘れてしまひておひますので、どういふ改正が行われ、そのことによつて増えていつたのかということ、ちょっともう一回教えていたきたいなと思ひます。で、そのときに、日本の改正するその考え方の背景とかですね、そういうものもちょっと教えていたきたいなと。

それから、これは分かつてはいたんですけどもやはりとても衝撃的だったのは、子どもが親の言語や文化を否定しないような環境をつくつていくことが大切だ、というご指摘もありました。で、これはもちろん、子どもが親の言語や文化を否定するようなやはり環境というものが子どもを取り巻いているというそういう事実がある、ということなわけですね。で、その否定する力というのはい体どういふ力が働いているんだらうというのが私にとってはとても重要なことじゃないかなと思ひました。

それから、子どもたちのアイデンティティの問題ですけども、民族名というものをどのように表示、どこでどういふふうに表示し、自分のものとしてできるのかできないのかということ、をちょっとご指摘がありましたけれども、これもですね、とても重要な問題じゃないかなと思ひますが、一般的に民族名という

のは、では人間にとってアイデンティティとして必要なのか必要じゃないのかという議論も当然出てくるんじゃないかなと思ひますね。そのあたりについて、簡単でけつこうですので、ちょっとお話しただければありがたいんですが……すみません、たくさんで。

**リリアン・テルミ・ハタノ** はい、ありがとうございます。まず、あの……できるだけ短く簡潔にしたいと思ひますけど、89年の入管法を見ていると——その前にひとつ、日本とのつながりのない外国人たとえばイランだったりとか二国間の協定で日本にビザなしで入国できていた人たちとのいろんな摩擦があったというのがひとつあるんですけど、まあ日系人というのは日本人により近い外国人ということで、なじみやすいだらうというような背景がひとつあると思ひますね。日系二世であれば3年間日本で制限なく仕事ができる、でもそれは労働者としての受け入れではなくて、家族と、なんといふか帰国みたいな、Uターンみたいな受け入れかた、家族を訪問するということ。でも滞在が長くなれば仕事をする必要もあるだらうからということ。で労働も許認する、そういつた背景もあります。それで二世は3年ビザ、三世とその二世の配偶者は1年といふような定住者のビザができたんです。で、バブル期は、今は考えられないかもしれないけれども、会社が倒産するといふのは発注がないわけじゃなくて発注はあるけれどもそれを作る担い手がない、といふ背景ですね。経済界はそのためにどんどん法律を改正するといつた、外国人に対してもプレッシャーがあったり、今もちょっと経済界はいろんな動きがあるんですが、高度人材を受け入れるとかまた言ひてますけれども、一時期は外国人採用といふことで、そういうような背景もまたひとつあったと——そのくらの回答にさせていただきます。

もうひとつの母語のことなんですけど、どういつた力が働いていたかといふのは、まあやっぱり圧倒的多数と少数とは力の違ひの差がありますけれども、やはり、「日本は単一民族だ」といふような、これはもし皆さんのなかでそう考える人がいればとても寂しいんですけども、アイヌも最近ですね、2008年ぐらいにやつと少数民族として認められたとかで、やはり「日本人」「日本民族」といふような単一がいいといふ考えのもと、多様性といふのがどうしても周縁に追ひ出されてしまひ、そういう力の問題ですね。多様な考えと向き合つて交渉してい

くというのは、やはり対立したりすることもあるだろうけれども、それがめんどくさかったりとか大変だとか、ですから「我々日本人は」といって収まってしまうような社会構造が、どうしてもそう考える人が圧倒的に多いので、そうじゃない人が自分を出せない環境というのがある。それを、やはり子どもたちは言葉は分からなくても分かってもらう察知するという、自分の親が外国人であるということを言う機会がなければ言わない、なんとなく言わないでいってしまうような、環境というのはそういうものじゃないかな……と。

で、さきほどアイデンティティの問題で、民族名の必要性というのは、まあそれはそうですね。でも、私が言っている民族名というのは、本当の名前を知らない状況ですね。たとえば私の名前「リリアン・テルミ・ハタノ」、民族名って難しいですね。民族的には親が日本人なので、ハタノという名前は日本名ですね。テルミというのは祖母がつけてくれた名前です。「光」と「美しい」でテルミという漢字があるんですけど、私は日本国籍を持ってないのでそれを正式に登録してはいませんが、リリアンというのは現地名——現地名というのはカトリックのクリスチャン名をつけているんです。何をもって民族名というか、そういう議論はあまりしたいと思わないんですけど、そういういろんな名前にさまざまな情報があって、性別とか民族性だったりとか場合によっては時代だったり世代とかいう情報があるのを、それを完全に見えなくしてしまうということはやっぱり……、ブラジルの場合はどんどん長くなっていく、長いほうが伝統がある家族であって好ましいと受け止められているとかいうような背景はありますけれども、それはヨーロッパ的な考えですが、そういうようなものを、名乗りたい名前を名乗れるような環境づくりというのが必要じゃないかなと思っています。それにはまだまだ日本は程遠いのではないかなと思っています。だから、ひとつのバロメータになるのではないかなと。オリンピックで日本の代表のディーン元気選手がいましたよね。ああいう名前が出てくると、ダルビッシュとかってね、どんどん出てくると、無意識に日本にはいろんなルーツの人が日本を代表する人がいるんだなあとというような時代に、少しずつ変わってはきているけど、普通の小学校ではまだまだそれは受け入れられているかという、そうではないように子どもは感じているようなので、まあ、私たち大人がまだまだがんばらなければならないんじゃないかなと思っています。

**司会** よろしいでしょうか。ありがとうございます。時間が迫ってきておりますので、あとお一人だけご質問を受けたいと思います。——どうぞ。

**質問者 2** わたくしは、秦野市の市民として現在秦野市のひとつの中学校の中で、外国つながりの子どもたちの学習支援の活動をやっております。そこに、こちらにいらっしゃる田口先生がアドバイザーをなさっている TICC さんの学生さんたちがお手伝いに来てくださって、半年ぐらい一緒に活動させていただいています。わたくし 7 年ぐらい前にちょっと経験が——別な短大さんとの関わりの中で学習支援の必要性を感じたので、中学校に入りこむ向学支援のかたちで現在は活動しているので、ほんとに今日先生がお話くださったことはもう、自分のことのように感じられることがたくさんあって、非常に、ある意味うれしかったんですけども、先生のお話の中には直接学校との関わりというのは出てきていませんでしたが、わたくしは学校に入ったことでやはり先生方との関係性の中で非常に大きな課題があるなということを感じております。もしそのへん先生のお話で、もう少し聞かせていただけることがありましたら、ちょっと参考のためによろしく願いいたします。

**リリアン・テルミ・ハタノ** はい、ありがとうございます。えーと、20 年日本にいますので 20 年は学校と関わりがあるんですが、ただ最近の過去 8 年は、日本の学校との接点は少なくなりました。子どもたちはずっと日本の学校に行っているんですけども、最近私はブラジル学校の現状を改善するというか——日本の学校って普通、けっこう 2～3 年で先生が変わったりするんですけど、そういう、「たんぽぽ」に来ていた子どもたちがいる学校の先生とはみんなと接点を持っていたんですけど、最近ほとんどないですね、付き合いが。日本の学校が変わるといのは、今の内閣の前の内閣のとき、教育基本法とかが変わったときにやはり、日本の学校が変わるといのは変わっていくんですけど、私が望んでいる方向とはちょっと違う方向に進んでいるのではないかなというところがあって、ブラジル学校が変わる可能性のほうがもっと高く早く早いんじゃないかなというのがあって、ブラジル学校にいる子どもたちにもやはり別の問題、逆に日本に住みながら日本のことを全然知らないとか、日本語が全然話せなかったりというよ

うな問題があると思うので、そちらのほうに研究とか活動もシフトしていった部分もあるんですけども、でも、学校の現場の先生との付き合いはできるだけ持つようにはしていますが、なかなか難しいところがありまして、関西はどんどん難しくなっているというような側面はあります、はい。いや、積極的に避けているわけじゃなくて、なかなか、けっこう忍耐強くやらないとだめなので、その投資がけっこう難しいところですね。

**司会** どうもありがとうございました。ほんとうはもっともつとご質問をいただきたいところですけども、残念ながら時間がきています。

たぶん2つの世界に生きるということで、その難しさがすごくあるのかなというふうに思います。きょうは、聞きにいらしていただいた学生さんの中にも海外から日本にお見えになっている方もたくさんいらっしゃるようですが、2つの世界を生きる——ぼくも去年までイギリスにいましたけれど、2つの世界で暮らすということは、違う価値観を受け入れなければならなくてとても苦しいことなんですよ。でもそれをきちんと正面から受けとめて形をつくっていかうとされている、きょうはリリアン先生のお話にはほんとうに感動いたしました。

最後になりますが、リリアン先生に大きな拍手でお礼を申し上げます。ほんとうにどうもありがとうございました。 (拍手)